近世スマトラの内陸民族世界の形成における移住者の役割

——「土着先住民」の創出——

弘末雅士

一　はじめに——問題の所在
二　スマトラ島の民族集團とその名稱
三　近世前夜のスマトラと商人達の活動
四　アチェの擡頭と後背地との關係の變容
五　內陸農業空間と「土着民」の創出
六　結　　論

一　はじめに——問題の所在

中國及びインドという多人口地域の間に介在し、海洋交通路の要衝に位置する東南アジアでは、十九世紀後半に至るまで人口に比し、利用可能な土地が豊富であったこともあり、古くから人々の移動性が高かった。このため社會の形成に移住者は重要な役割を果してきた。とりわけ十五—十七世紀の東西海洋交易活動の活性化した時代、東南アジアの海域と內陸部との人々の往來が活潑となり、彼らの役割は一層重要となった。

この時期鄭和の遠征に代表される中國の積極的對外政策の展開や西アジア、インドさらには西歐からの香辛料を求めて來航する商人の增加により、東南アジアの港市は繁榮した。(1) ペグー、アユタヤ、パタニ、マラッカ、ジョホール、アチェ、バンテン、ドゥマック、マカッサル、ブルネイ、ホイアン、ハノイといった諸都市は、人口過少の東南アジアにもかかわらず當時十萬人前後の人口を有するコスモポリタンとなった。そして都市の周邊內陸部は、港市とのネットワークが強化され、米を始め胡椒等の商品作物栽培が盛んになり、農業空閒が發展をとげた。

本稿は、こうした近世東南アジアの一角を占めたスマトラ島をとり上げ、沿岸部にアチェ及びマレー人港市國家が隆盛したのに對應して、後背地の內陸農業空閒に移住者の參入を招き、ガヨ、バタック、ミナンカバウの民族世界の原型が形成された過程を解明したい。今日スマトラ島には沿岸部にアチェ人、マレー人が、內陸部にガヨ人、バタック人、ミナンカバウ人（一部は沿岸部にも居住）、ルジャン人、ランポン人らが主要民族グループとして居住する。(2) こうした民族集團は、しばしばプロト＝マレー系（B. C. 2500-2000 頃島嶼部に移住：例えばバタック人）、新マレー系（上記の時期より後に移住：例えばミナンカバウ人、マレー人）という分類のもと、內陸部ではとりわけ古くから固有の民族集團を形成していたと考えられがちであるが、(3) その民族名を歷史的に考察してみると、多くはさ程古くからそれらが用いられていたものでないことがわかる。

本稿は、スマトラ島內陸部の民族世界の形成に近世前夜から商業・宗教活動を展開していた南インド系を始めとする移住者が關係したことを考察し、彼らが內陸部に定着するに際し、その存在を正當化するため「土着先住民」という概念の創出に寄與したことを論じたい。從來東南アジア史研究において、こうした移住者は、インド化やイスラーム化を論ずる際に外來文化をもたらす役割を擔ったとされ、(4) それを受容した東南アジア側との對比的觀點から一般に論じられてきた。(5) が、そうした外來文化をもたらした人々が定住した過程で、いかに現地側の主體の觀念の形成に關與したのかは、あまり論じられて來なかった。本稿はスマトラの事例を通して、この「現地側の主體」形成にこうした移住者がしばしば關與

し、インド化やイスラーム化と東南アジア側の主體化とを介在した彼ら移住者の役割について考察したい。(6)

二　スマトラ島の民族集團とその名稱

スマトラ島の沿岸部に居住するアチェ人やマレー人と、內陸部に居住するガヨ人、バタック人、ミナンカバウ人らとでは、エスニック・アイデンティティの形成のし方が異なる。

アチェは、十五世紀末に北スマトラのクタラジャに成立した港市國家で、十六世紀中葉から十七世紀前半にかけて北スマトラ東西沿岸部を中心に隆盛した。今日のアチェ人は、この北スマトラ沿岸域に居住する人々を指す。またスマトラ東岸の沿岸部には廣くマレー人が居住する。彼らは十四世紀終りに建國され、十五―十六世紀初めには繁榮する港市國家となったマラッカ王國のもとで、マレー語を使用し、イスラームを信奉した人々を起源とし、以降マラッカ海峽周邊地域に居住するに至った人々である。

こうした沿岸住民は元來出身地が多様で、海域での活動を通し、様々な人々と接觸・混淆した。彼らがアチェ人、マレー人としての民族意識を形成し始めたのは、むしろ彼らの活動範圍が制限されざるを得なくなった時期以降であり、マレー人の場合はポルトガルによるマラッカ占領（一五一一年）以降、アチェ人の場合はオランダにより海域での影響力を後退せざるを得なくなった十七世紀後半以降と言えよう。アチェやマラッカが隆盛した時代には、これらの港市支配者の間に一種の世界帝國の意識が存在した。

一方そうした隆盛する港市とネットワークを有した後背地住民の間で、この時代共通の祖先から出自したとする人間集團の意識が形成され始める。本稿の對象とするガヨ、バタック、ミナンカバウはその集團名稱であるが、これらの名稱の由來自體が、沿岸港市との關係の中で語られたものが多い。

ガヨ（Gayo）が文獻上初めて登場するのは、十四世紀後半に編纂されたとされる『パサイ列王傳』（Hikayat Raja-Raja

Pasai）である。パサイは、北スマトラのマラッカ海峡とインド洋との分岐點ジャンブ＝アイル岬の周邊に成立した島嶼部の初期のイスラーム國家の一つであった。一二九二年にパサイ近郊のプルラクに立寄ったマルコ＝ポーロは、イスラーム商人がひんぱんに來航するようになって近年プルラクの町の人々がイスラームに改宗したことを傳えている。(7) パサイの王がイスラームに改宗したのもほぼ同じ頃と考えられ、イブン＝バトゥータの旅行記には一三四五年に彼を迎えたパサイ（サムドラ）のイスラーム教徒のスルタン＝アル＝マリク＝アッ＝ザーヒルの名が登場する。(8)『パサイ列王傳』は、初代パサイ王がイスラームに改宗し、そしてこの町の人々の多くがイスラームを信奉することに積極的であったと述べた後、以下の記述を殘している。(9)

この町の一角にイスラームに入信したがらない一集團があった。彼らはそこでパサンガン川上流へ走り去り、そのため今日に至るまで彼らはこの町で Gayo と呼ばれてきた。

「そのため」の部分の記述のみでは明らかでないが、北スマトラの沿岸部で gayo-gayo は〝走る〟を意味する語であり、イスラームに改宗することを避けて内陸部のパサンガン川上流域へ〝走り〟去ったため、Gayo と呼ばれるようになった、の意味である。『パサイ列王傳』はガヨを、北スマトラの沿岸イスラーム教徒達が付與した内陸部の非イスラーム教徒に對する呼稱としている。

一方バタック（Batak）の名稱は、『パサイ列王傳』には登場しない。バタック人はプロト＝マレー系に屬するとしばしば指摘されつつも、その名稱の語源は定かでない。(10) 明確に北スマトラにおいて Batak に比定できる名稱が登場するのは、一四三五年に北スマトラを訪れたニコロ＝デ＝コンティの記述である。以降バタックは、港市に寄港した人々により食人の慣習、好戰性、未開性をその特徴として語られることが多くなる。コンティはパサイを訪れた際、スマトラ島について記し、その中で Batech（Batak）について以下の記述を殘している。(11)

コンティが言うには、タブロバナ〔スマトラ島（引用者）〕は周圍が六千マイルある。人々はたいへん殘忍で、習慣は

野蠻である。……（中略）……彼らは偶像崇拜者である。この島は、通常より大きい胡椒及び長胡椒、龍腦とまた金を莫大に産する。……（中略）……この島のBatechと呼ばれる所に、人喰いが住んでいて、常に彼らの近鄰の人々と戰いを行なう。彼らは頭蓋を寶物として保持する。何故なら彼らは敵を捕えると首を切り落とし、その肉を食べ、頭蓋を貨幣の代わりに使うためにたくわえるからである。

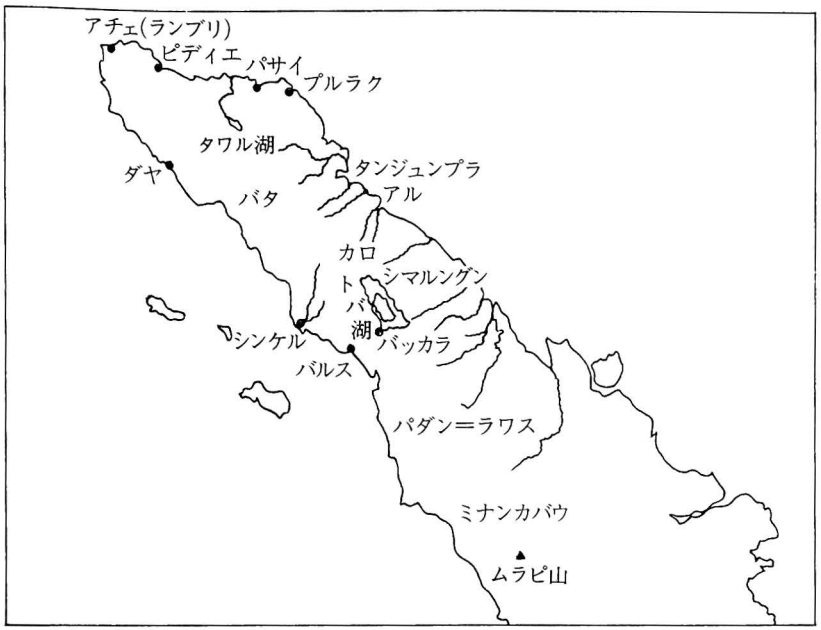
當時既に胡椒栽培が行なわれていたのは北スマトラであり、また龍腦や金の産地でもあった。その北スマトラで、食人を行ない、好戰的な人々の居住する地域が、Batech と呼ばれるとしている。

その後ポルトガル人が十六世紀に來航し始めるとバタックの記述は增加する。例えば一五一〇年代にスマトラ島に來航したトメ＝ピレスはパサイの記述の後に、

バタ（Bata）王國は一方でパセー〔パサイ（引用者）〕王國に接し、他方ではアル王國に接している。この國の王はラジャ・トミアン（Raja Tomjam）と呼ばれる。……（中略）……このトミアノは内陸で何回も戰爭をしている。彼は時には義父〔アル王（引用者）〕と戰い、時にはパセーとも戰っている。(12)

と述べている。アルはデリ周邊に十三世紀頃より存在した王國であり、ラジャ・トミアンの名稱から判斷するとバタ王國はアルとパサイの間のタミアン及びその内陸部を中心に存在したことになろう。その後一五三九年にバタ王國を訪れたメンデス＝ピントの記述によると、バタ王は非イスラーム教徒であり、イスラーム新興國アチェと激しく抗爭しており、王國の勢力範圍が北スマトラ西岸のシンケル附近の後背地からアチェと近接する内陸部に存在したことが明らかとなる。(13)

この北スマトラを始め、マレー半島の内陸部やフィリピンのパラワン島の非イスラーム住民の中に Batek, Batak という民族名が存在する。ルーブは、この Batak の名稱が元來イスラーム教徒による非イスラーム教徒に對するニックネームではないかと推定する。(14) こうしたきわめて類似した名稱が複數の非イスラーム住民に用いられたことと、バタック人自身がその名稱の由來を統一的に説明していないことを考え合わせると、この呼稱が元來沿岸居住者か外來者による内陸非



地圖表1　16世紀初頭の北・中部スマトラ

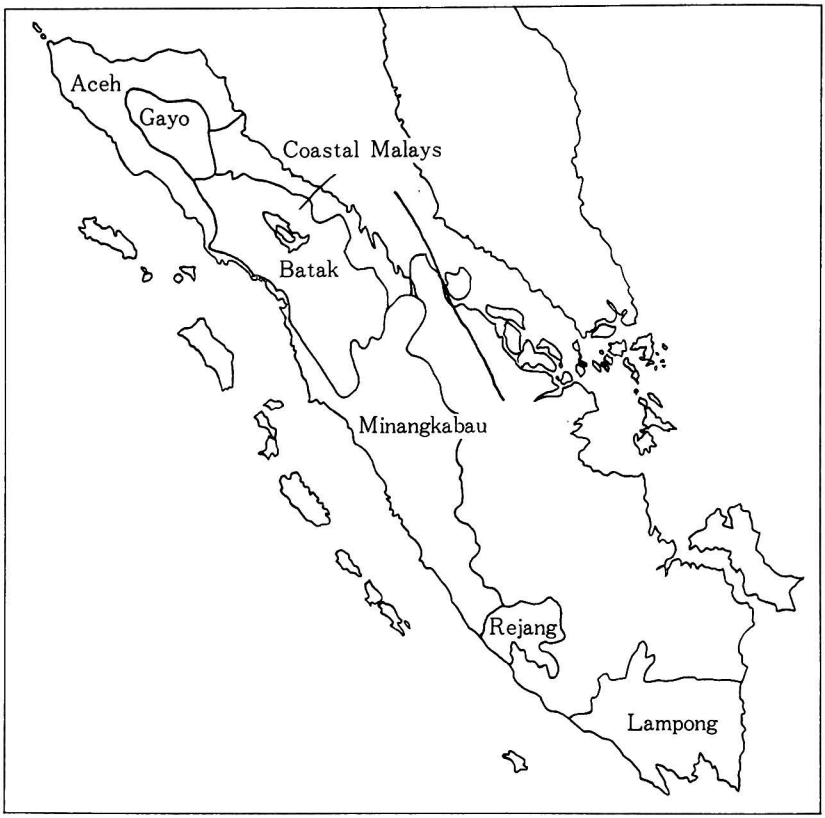
イスラーム住民に對する蔑稱であった可能性は高い。ともかく北スマトラにおいてバタと呼ばれた國は、上述の史料をもとに考えると、その位置がほぼ**地圖表1**に示された通りになるであろう。

この位置は、現在ではガヨ人及びアチェ人の居住區となる。今日のバタック人居住地域は、それよりも南のバルスやアル（デリ）の内陸部に位置するが、十六世紀初めのピレスの以下の記述によれば、それらの内陸部はバタ王國ではなく、ミナンカバウの影響下にあったことが明らかとなる。

この王國〔バルス王國（引用者）〕は一方はティコに接し、他方はキンシェル〔シンケル（引用者）〕王國の地に接している。内陸部ではメナンカボ人と取引をしている。(15)

またアル王國についてはその産品について述べた後、

これらの商品の若干はパセー・ペディル經由で捌かれ、その他のものはパンシュール〔バルス（引用者）〕經由で捌かれる。それはアルの國の一部がメナンカボの國にあって、そこにはいくつかの大きな河があ



地圖表 2　現在スマトラの主要民族

り、サモトラ全島は内陸部でこれらの河によって航行することができるからである。(16)

とある。

ミナンカバウは、『パサイ列王傳』によれば、ジャワのマジャパヒト王國の中部スマトラ遠征に對し、鬪牛戰で雙方が決着をつけることとなり、勝利したスマトラ側がその勢いでジャワ軍を追放し、「その水牛が鬪った地がMinangkabau〔勝利した水牛〕と今日まで呼ばれるようになった」ことにその名稱が由來するとされる。(17) パサイにとって當初ミナンカバウという語は、ジャワの影響力より獨立したスマトラと同義であった。マジャパヒトの影響力より脫したミナンカバウの地の王アディティヤヴァルマンは、中部スマトラのパガルルユンを據點として、中部

及び北スマトラ内陸部にその勢力の擴大につとめた。その結果十六世紀初めにおいてミナンカバウは、上の如くバルスやアルの後背地に影響力を及ぼしていた。

ではこうした元來他稱の可能性の高い〝ガヨ〟や〝バタック〟、またジャワより獨立したスマトラの意味の〝ミナンカバウ〟の名稱が人々に受け入れられ、今日のガヨ人、バタック人、ミナンカバウ人の民族集團が形成されるのはいかなる理由によるのだろうか。次章では、この過程において重要な役割を果たしたと思われる沿岸部と内陸との閒を介在した人々について考察したい。

三　近世前夜のスマトラと商人達の活動

スマトラ島は熱帶降雨林氣候のもたらす豊かな降雨により、内陸部で龍腦、安息香、沈香、蘆薈、籐、蘇芳などの森林生産物を産し、また金、鉛、銀などの鑛物資源も産した。これらは古くから貴重な交易品として取引された。加えて十五世紀初めまでに胡椒栽培が南インドのマラバールより導入され、北スマトラはその主要産地となり、パサイはその輸出港として榮えた。

こうした商品取引には古くから地域閒を往來する商人達が關與したが、その中で近世前夜とりわけ重要であったものの一つが、ベンガル灣を介して近接する南インドと關係を有した商人の活動である。南インドのチョーラ朝は、十一世紀にベンガル灣を越えマラッカ海峽周邊にも影響力を行使した。これにより南スマトラを中心にマラッカ海峽域に君臨した古代帝國シュリーヴィジャヤの勢力を後退させるとともに、近世へ向け海域と内陸部との新たな關係を構築させることとなった。

チョーラの首都タンジョールに殘されたラージェーンドラチョーラデーヴァ一世の一〇二五年のマラッカ海峽遠征を記した一〇三〇年の銘刻文書によると、チョーラ軍はまずマレー半島西岸のケダーに據點を設け、シュリーヴィジャヤ（パ

レンバン）、パネイ、マライーユール（ジャンビ）、ランブリのスマトラ主要港市を制壓し、併わせてマレー半島北部の下ビルマの港市や半島東岸のナコンシータマラート、ニコバル諸島をも影響下に置いたと主張している。[18] またラージェーンドラチョーラデーヴァ一世の後を繼いだヴィーララージェーンドラは、一〇六八年再びケダーに遠征軍を派遣したと王の銘刻文書は主張している。[19]

こうしたチョーラの活動は、東南アジア側の年代記や宗教施設、碑文にもその影響をとどめている。

十四世紀末にマラッカ海峡の中央部にマラッカ王國を建國したマレー人の王統記 Sejarah Melayu（『マレー年代記』〔一六一二年〕）は、王國の建國者がアレクサンダー大王（Raja Iskandar Zulkarnain）の血統を有し、チョーラ王（Raja Culan）の子孫であるとしている。[20] それによれば、Raja Culan は中國を征服するためにシンガポールまで進軍した際、海に潜り、海の王 Raja Aftabu'l-Ardl に迎えられ、彼の娘と結婚した。それにより王には三人の息子が出來、その三人は海中から南スマトラのパレンバンのブキット＝シグンタンに降臨した。そして長男は中部スマトラのミナンカバウの王に、次男は北スマトラのタンジュンプラの王に、三男スリ＝トリ＝ブアナはマラッカ海峡を越え、シンガポールの町を造った。このスリ＝トリ＝ブアナの曾孫がマラッカの地に移り、マラッカ王國を建國したという。このように『マレー年代記』は、マラッカを始めスマトラ島の要衝のミナンカバウとタンジュンプラの諸王がいずれもチョーラ王の子孫であると唱えている。

また上述したラージェーンドラチョーラデーヴァ一世の銘刻文書に登場した中部スマトラのパネイの附近のパダン＝ラワスには十一―十四世紀のヒンドゥ・佛教遺跡が存在し、Biaro Bahal I のブロンズ像を始め彫像において南インドの作風の強い影響が指摘されている。[21] そしてこの遺跡のうちポルラック＝ドロックには一二一三年の年號が入った南インド系文字による數行の銘刻が存在する。[22] その他北スマトラの龍腦の産地周邊でも南インド出身の商人達の活動が活性化し、バルスの近郊のロブ＝トゥアに殘ったタミル語碑文には、一〇八八年にタミル商人ギルトがその地で活動していたことが記

されている。[23]

チョーラ王國は十二世紀後半に衰退し、十三世紀には滅亡するが、十三・十四世紀の南インドは東西航路の接點の役割を擔い續け、[24] スマトラ島との交流はその後も繼續した。先に述べたパダン＝ラワスのポルラック＝ドロックの一二一三年を示す南インド系文字の刻文の他、ミナンカバウの王アディティヤヴァルマンの一三七五年のバンダル＝パパハットの碑文には、左側にスマトラ獨特の變形古代ジャワ文字によるサンスクリット語の韻文が、右側には南インドのグランタ文字を使用して同じ內容を表現したと思われるものが存在する。クロムによれば、住民の中に古代ジャワ文字が讀めず、南インドのグランタ文字のみを解する相當な數の住民がいたことを示すとしている。[25]

また『パサイ列王傳』や『マレー年代記』も、スマトラが十三世紀以降も南インドと緊密な關係を有したことを語っている。『パサイ列王傳』によれば、パサイの初代王メラ＝シル（Sultan Malikul Saleh〔一二九七年沒〕）は、南インドのマラバールを經由してその地の王位を捨て修業者となったマラバール人の元王族にともなわれてパサイにやって來たメッカ出身のイスマイルに導かれて、イスラームに入信したとされている。[26] また『マレー年代記』によれば、イスマイルはまずバルスに赴き人々をイスラームに改宗させた後、同じく北スマトラのランブリ、アル、プルラクを經由してそれらの人々を改宗させ、そしてサムドラ（パサイ）にやって來てメラ＝シルを改宗させたとしている。[27] プルラク及びパサイは既に述べたように、十三世紀終りのマルコ＝ポーロや十四世紀中葉のイブン＝バトゥータの記述から住民がイスラームに改宗していたことが明らかとなるし、十五世紀初めの鄭和の遠征に參加した馬歡によれば、アル、ランブリの國王がイスラーム教徒であったことがわかる。[28] いずれの順番にせよ、『マレー年代記』もイスマイルはマラバール經由でやって來たとしており、北スマトラのイスラーム化に南インドが重要な役割を擔ったことを述べている。

その他『パサイ列王傳』には、メラ＝シルが在位中南インドより商船が來航し、その船から金脈を探る能力を有すると自稱する一人の山師が彼のもとにやって來、七つの金脈を掘り當てたという記述がある。[29] またメラ＝シルから四代目のス

ルタン＝アフマッドのもとに、南インド出身のヨガの行者が滞在したことを傳えている。[30] その他スルタン＝アフマッドの息子が南インドからやって來た四劍士と對決し、彼らを退去させた話も登場する。[31] これらの『パサイ列王傳』の記述は、必ずしも事實ばかりとは限らないが、十三・十四世紀當時の北スマトラと南インドとの交流の一局面を表現していると言えよう。そこに登場したのはイスラーム修業者、山師、ヨガの行者、武藝者いずれも遊行・移動する人々である。

こうした南インド出身者は、スマトラ島の内陸部における商業活動網を擴大させる一役を擔うこととなる。先に述べたように十一世紀終りにバルス附近にタミル商人ギルドが存在したが、彼らの活動は港市附近に限られなかった。北スマトラの内陸部は龍腦や安息香、金の産地であり、バルスを始めパサイ、プルラク、ランブリ、アル等の港市は後背地との商業ネットワークを必要とした。

現在カロ高原を中心に居住するバタック人の一支族カロ＝バタック人のシンビリン氏族のうちに、祖先の出身が南インド（Benuwa Keling）であると唱え、Colia, Pandia, Meliala, Depari, Berahmana, Pelawi 等のタミル語系の氏族名を保持した集團が存在する。[32] これらの氏族名は、インドの地名（Cola, Pandya〔デカンの王國〕Malayalam〔Malabar〕）やバラモン、Pahlawi に由來すると考えられている（Depari は定説なし）。彼らが南インド出身者の末裔である確證はないが、それを意識した集團であったことは確かである。Colia, Pandia, Meliala の氏族名は、かつてそれらの地との關係を唱えたことに由來すると考えられよう。[33] 彼らの傳承は、彼らの祖先がバルス及びシンケルの後背地パクパク地區に居住し、その後カロ高原へも活動網を擴大したとする。[34]

カロ高原は、十三―十六世紀に隆盛したアル王國が存在したマラッカ海峽岸の後背地であった。このアル王國の主要港市であったコタチナやベラワンでは、一九七二年及び七九年の發掘調査によりシヴァ神の祠と佛教の祠が發見され、後者の跡より後期チョーラ時代（十二・十三世紀）の佛像とヴィシュヌ像が發掘され、像は南インドからもたらされた岩に刻まれたものであることが明らかとなった。[35] またその他南インド系の赤色陶器の破片が多く見つかった。アルが南インドと緊

密な關係を有したことを示している。このアルの後背地のカロ高原の交通路の要衝デリ＝トゥアやシブラヤからは宋代、元代の陶器が出土し、アルと後背地との關係を語っている。

こうした内陸部の商業活動網の進展は、西岸のバルスやシンケルらと東岸のアル、パサイとの間を絡ぐこととなった。バルスとアルやパサイが後背地を介していつ頃から緊密な交流を始めたのか確定することは困難であるが、十六世紀初めにピレスが來航した時には、パサイとアルの東岸とバルスやシンケル、ダヤの西岸の港市とが内陸を介して産品を往來させていた。[36] 先にも述べたように、パサイには十五世紀初めまでに南インドのマラバールより胡椒が移植されたが、その栽培はコンティの記述にあるように一四三五年には西岸のバタの地（ダヤ附近）やピレスの記述によると、シンケル附近にも擴大した。マラバールより移植された胡椒が東西兩岸の後背地で栽培を擴大し、かつ兩岸の産品が内陸を介して往來したことは、内陸部で活動した南インドと關係を有した商人達の役割が少なからぬものであったことを示している。

ミナンカバウのパガルルユン王朝の擡頭は、中部スマトラと北スマトラとを内陸部においてより緊密に結びつけることとなる。『パサイ列王傳』は、前にも觸れたように、ミナンカバウのマジャパヒトに對する勝利の記述で結びとなっている。これは、北スマトラの港市パサイが、中部スマトラ内陸部におけるミナンカバウ勢力の擡頭を讃えたことを意味している。アディティヤヴァルマンに始まるパガルルユン王家は、北スマトラの内陸部にも影響力を擴大し、トバ湖周邊地域では、アチェの影響力が及ぶ以前ミナンカバウからやって來た人々が東岸後背地の金の産地であったランカット内陸部やタナ＝ジャワまた西岸のバルスに到達し、それらの地の支配者になるまでに、周邊内陸地域の人々と接觸し、緊密な關係を樹立した傳承を有している。[37]

十三―十六世紀初めのスマトラは、イスラーム、南インド系、ジャワ系、スマトラ在來の諸文化が混在また混淆した狀況を呈していたと考えられる。先にも述べたとおり南インド出身者及びその影響を受けた人々は北スマトラで廣範に活動していたし、『マレー年代記』はミナンカバウの王もチョーラ王の子孫であるとした。また一二七五年にはジャワのシン

ガサリ王朝のクルタナーガラ王がパマラュと稱する遠征を南スマトラに對して行ない、さらにマジャパヒト王朝も十四世紀の中葉に中南部を中心にスマトラ島を一時影響下に置いた。したがってジャワにおけるシンガサリ、マジャパヒト期のブッダ・シヴァを融合した密教信仰が、スマトラにも影響を及ぼした。前に述べたパダン＝ラワスのヒンドゥ・佛教寺院には、南インドからの影響と同時にジャワの密教信仰がもたらされ、Biaro Bahal II の寺院にはその一派の崇拜するヘルカが祀られた。(38) ミナンカバウのスロソの石碑は、ジャワに滯在したことのあったアディティヤヴァルマンがヘルカ禮拜を行ない、解脱の成就者として聖別儀禮を執り行なったことを記載しており、パガルルユン王家が密教信仰の信奉者だったことを語っている。(39) したがって海岸部にイスラームが擴がっていく一方で、スマトラの内陸部では南インド系、ジャワ系、在來の諸文化の混淆した狀況が進展していたと言えよう。

十五・十六世紀の東南アジアにおける交易活動の活性化は、港市と内陸とを往來する商人の活動を活潑にした。その一因となった胡椒は先にも述べたように十五世紀にはパサイを始めバタ、シンケルの地でも栽培がなされ、十六世紀にはスマトラは東南アジアにおけるその栽培の中心地の一つとなった。そしてマラッカ海峡中央部に位置したマラッカは、東西海洋交易の中繼港として十五世紀より繁榮し始め、パサイを始めとするスマトラ東岸の港市を介して内陸部の胡椒や金等を集荷した。十六世紀初めにマラッカを訪れたピレスは、「マラッカの支配者となる者はヴェネザ（ベネチア）の喉に手をかけることになるのである」(40) とその重要性を語っている。

こうしてスマトラ島では南インド系商人やパサイ商人、ミナンカバウ商人が活動を活性化し、廣く内陸部に商業ネットワークをめぐらせた。またマラッカを中心としてマレー人商人達もスマトラ沿岸部との關係を緊密にした。そして彼らの存在を介してそれまで主に港市居住民や外來者によって用いられた内陸居住民に對する名稱が、當該の住民自身にも意識され始める。

一五三九年六月にマラッカ（一五一一年よりポルトガル占領）に到着したメンデス＝ピントは、北スマトラでイスラーム新

興國アチェと抗争していたバタ王の使節が王の手紙を携え、マラッカの司令官に援助を求めて來たことを記している。その手紙の中でバタ王は以下の如く述べている。(41)

……（前略）……余こと、バタ人の王アンジェシリ・ティモラジャは、もし余のランシャラ船とジュルパンコ船がどの方角をも安全に航海しうることのできるように誠意のしるしとして貴下の手になる通行證を發行して下さるならば、貴下の友情を今新たに欲し、我が國土の作物で貴下の部下を富ませるために、新たな交易で金、胡椒、樟腦（龍腦）、伽羅、沈香で貴下と余の王の稅關を滿たさんと考えております。……（後略）……〔（　）内は引用者〕

これまで金や龍腦、胡椒を產しながらも、好戰的、食人、野蠻の語を伴って語られていたバタに對し、ここでは相互の「誠意」「友情」を前面に掲げることにより、交易相手として魅力ある「バタ人の王」を唱えているのである。この時ポルトガル人司令官とバタ王との交渉を仲介したのは、マラッカ出身のマレー人商人であった。

ガヨやミナンカバウに關して當該の人々がどのようにその名稱を認識したのか史料がないので確かなことはわからないが、沿岸部との往來が活潑になっていたことは閒違いない。一般に沿岸港市と內陸部との關係が安定的に維持されているうちは、內陸住民が自己の姿を特に規定する必要はないが、兩者の結びつきが變容したとき、內陸部は新たな狀況下で港市との關係を通して自己の世界を再構築せねばならなくなる。スマトラ島においてそうした關係の變容を生み出すのが、上で觸れたアチェの擡頭とその背景となる東西海洋交易活動の變化である。

四　アチェの擡頭と後背地との關係の變容

上述したように東西海洋交易における胡椒を始めとする香辛料の需要の高まりは、海域東南アジアにおける商業活動を活性化させた。ポルトガルを先頭とするヨーロッパ人のアジア交易への參入も、こうした狀況下で起った。一五〇九年に當時東南アジア最大の中繼港となっていたマラッカを初めて訪れたポルトガルは、一五一一年八月マラッカを軍事占領

した。そしてインドのゴア、カリカット、ペルシャ灣のホルムズにも據點を設け、ポルトガルはヨーロッパへの香辛料の獨占取引を試みた。(42) またマラッカに寄港する船舶に高額の關税を課し、一五二一年には北スマトラのペディル、パサイをも占領した。

これに對し、イスラーム商人達はポルトガルの高關税と獨占交易體制に反發した。その代表は、十五世紀以降西アジアと東南アジアとを絡ぐ交易活動の中樞を擔い、ホルムズやインドでポルトガルと對立關係にあったグジャラート商人である。彼らの多くがマラッカ海峽を避け、インド洋からスマトラ西海岸を通りスンダ海峽へ抜けるルートを活用し始めた。スマトラ北端のアチェが代ってイスラーム商人を引きつけ繁榮する港市となった。(43)

十五世紀終りに成立したアチェは、一五二〇年代以降東南アジアにおける反ポルトガル勢力の代表的存在となった。アチェはイスラーム商人を引きつけるため、周邊内陸部の胡椒や森林生産物を輸出する港市を直接的影響下に置くことに着手した。一五二一年にピディエ、一五二四年にパサイ、一五三九年までにダヤ、バルスも影響下に置いた。(44) また周邊後背地へも勢力の擴大をはかり、バタ王國やアルとも抗爭狀態に陷った。先の一五三九年六月にマラッカを訪れたピントが述べたバタ王の使節がポルトガル人司令官のもとにやって來たのは、こうした狀況下であった。

アチェは遲くとも一五三四年までにオスマン＝トルコと直接交易に乘り出し、ピントの記述によると、一五三九年までにオスマン＝トルコより三百人のトルコ人兵士と數門の大砲を胡椒の返禮に受取っていた。(45) これらの武力及びパサイを占領した際ポルトガルの殘した火器が、北スマトラにおけるアチェの優位を保證したのであった。これに對抗するためバタ王はポルトガル側に使節を送り、彈藥の援助を申し入れたのであった。

マラッカのポルトガル人司令官はバタ王の申し出を受け入れ、火藥筒百本、火箭、花火を使節に渡した。こうしてバタ王はアチェと對戰することとなり、彼の側にはそれまで北スマトラに商業網を有したミナンカバウ人やマラッカと緊密な關係のあったスマトラ東岸のインドラギリ人、ジャンビ人らが援軍として參加した。(46)

一方、アチェには反ポルトガルを掲げるイスラーム勢のトルコ人、グジャラート人、マラバール人が援軍として派遣されていた。(47) それまで北スマトラの諸港市と緊密な關係を有したマラバール人イスラーム教徒が、南インドでのポルトガルの活動に對抗するため、ここではアチェ側に與した。北スマトラで活動してきた南インドと關係を有した人々と南インドとの直接的繋がりは絶たれた。

戰鬪はアチェの中心地附近でなされたが、兵力と火器にまさるアチェはバタ王の攻撃を退けた。ピントは、これによりバタ王が壞滅的打撃を蒙ったとしている。(48)

またピントは、バタ王との戰いに勝利したアチェが、新たに派遣されたトルコ人援軍らとともにアルを襲撃したことを記している。(49) 兵力、海軍力、火器にまさるアチェは艦隊を率いてアルの町を六日閒にわたって大砲で攻撃した。アチェ軍にはこの際もトルコ人の他、マラバール人、グジャラート人らが加わっていた。アル側は寡兵でありかつ裝備も劣ったので、總崩れとなり、アル王も殺された。

アルはこうしてアチェの勢力下に入ったが、逃亡したアル王の妻は、ジョホール王の支援を得ることが出來た。ジョホール王は、ポルトガルに追放されたマラッカ王室の一族であり、舊マラッカ同様この港市はマラッカ海峽岸の港市を介してスマトラ島と緊密な關係を有しており、アチェの勢力擴大に對抗したのである。ジョホールの支援により、アルはアチェ軍を退け、王國を再興することが出來た。だがアチェは、一五六四年に再びアルを攻撃して占領し、アチェのスルタン（アラウッディン＝リアヤット＝シャー）の息子をその地の統治者に據えた。(50) また同じスルタンの統治期（一五三七―一五七一）にアチェは、さらに中部スマトラ西岸の金と胡椒の積出港パリアマンを影響下に置き、同じく息子の一人を統治者に據えた。

その後の後繼者のスルタン達は宮廷内の抗爭により短期閒の統治者がしばらく續いたが、十六世紀終りから十七世紀前半に至り、スルタンを中心とする集權體制が確立し、その權限が強化された。特に十七世紀前半に在位したイスカンダル

＝ムダ（一六〇七―一六三六）は、パリアマンの他、同じく内陸部に金や胡椒の産地を有する西岸の港市ティク、サリダ、インドラプラにアチェから代官を三年交替で派遣し、交易活動を厳重な統制下に置いた。[51] また東岸では十六世紀終りに再びジョホールの支援のもとに離反したアルを一六一二年完全に解體し、多數の住民をクタラジャに連行し、さらにその影響力を南のアサハンにまで擴大した。[52] そして一六一三年にはジョホールにも進攻し、マラッカ海峡におけるアチェの影響力を擴大し、マレー半島のケダー、ペラ、パハンをも服屬させ、これらの地の胡椒取引を監督下に置いた。

アチェはさらに、北・中部スマトラの内陸部にも影響力を行使した。パサイやダヤ、バタの後背地のタワル湖周邊に「四首長」（Kawal ni Si Opat）を任命し、彼らに各地區（Kejurun）を代表する權威を保障する代わりに、定期的な貢納を義務づけた。[53] 同様にアルとアサハンの後背地にあたるカロ地區やシマルングン地區でも「四首長」（Raja Perempat〔カロ〕, Raja na Opat〔シマルングン〕）を任命した。[54] アチェの擡頭により、港市と後背地との關係は從來以上に強固なものとなったのである。

こうしてアチェは、イスカンダル＝ムダの時代に全盛期を迎え、王都クタラジャは、北スマトラの在住民を始め、スマトラ各地やマレー半島より連行された人々、ニアスやベンガル、コロマンデル出身の隷屬民、西アジアを始めインド、ヨーロッパ、他の東南アジア地域出身の商人らが居住するコスモポリタンとなった。イスカンダル＝ムダの時代に作成された『アチェ年代記』（Hikayat Aceh）によれば、アチェ王國（Aceh Daras-Salam）は、オスマン＝トルコのカリフよりもその繁榮を讃美され、イスカンダル＝ムダ（「若きイスカンダル」）は、古えのイスカンダル＝ズルカルナイン（アレクサンダー大王）の再來とたたえられたという。[55] 當時の海域東南アジア世界にあってアチェは、世界帝國を自認したのであった。

五　内陸農業空閒と「土着民」の創出

港市は、港に産物や食糧をもたらす内陸農業空閒の存在を必要とする。アチェは北・中部スマトラの港市・後背地關係を從來以上に緊密にし、商業活動の活性化を招いた。だが、アチェ自體が食糧を他地域からの輸入に依存せざるを得ず、また後背地の生産活動を保障できる食糧を港市が内陸部に供給することがほとんど不可能である以上、アチェの隆盛は、内陸部に高度に食糧生産の可能な場所を現出せしめることとなる。北・中部スマトラにおいて、トバ湖畔、河川盆地が多いカロ高原、タワル湖周邊、中部スマトラのムラピ山のふもとの高地盆地は、そうした可能性を有する地であった。

カロ高原に二十世紀初めに居住していたカロ＝バタック族の傳承を研究したノイマンは、彼らのほとんどが西岸のシンケルの後背地からトバ湖周邊を經由してカロ地區にやって來たという傳承を有しており、世代數（一世代を二十五―三十年で計算）を考慮して彼らの多くが一六〇〇―一六五〇年の時期にこの地區にやって來たものとした。[56] 現在カロ＝バタック族は、カロ＝カロ、タリガン、ギンティン、プルアギン＝アギン、シンビリンの五氏族から成る。東西兩海岸閒の往來は前述したように近世以前からなされていたわけであるが、アチェによる胡椒の生産地であったバタ王國の解體や西岸部の制壓及び内陸農業空閒の必要性が、こうした移住に拍車をかけたと考えられる。これらの移動者のうちその多くが最後にカロ高原に定着するに至り、この地區に廣範圍に散在するのが前にも述べたシンビリン氏族である。彼らの傳承は、かつてアチェと對立關係にあったことを語っている。それによれば、ある時アチェのスルタンに米粉で染めた水牛を本物の白象に見せかけ獻納したところ僞物とわかり、スルタンの怒りを買い、逃げ落ちてカロ高原にやって來たという。[57]

このシンビリン氏族を始めカロ高原に居住するに至った多くの人々は、トバ湖畔の西北部（例えばシララヒ、シホタンさらにはサモシール島）を經由した。[58] 既に述べたようにトバ湖周邊地域にはアチェの擡頭直前にミナンカバウ地區より人々が到來したという傳承が存在するが、それに次いで多數の人々が去來したことになる。

一般に移住者は新たな場所に居住するにあたり、その地に先住する人々の間で受け入れられるため、先住者との親縁關係を唱えることが多い。前々章で觸れたミナンカバウよりやって來てトバ地區を巡回した後バルスの支配者（下バルス王）となった人物は、トバ地區においてこの地區の一氏族（Pasaribu）の一員として受け入れられたし、[59] 同じくミナンカバウよりやって來てタナ＝ジャワの首長となった人物は、サモシール島に滯在中その地の氏族 Sinaga を潛稱した。[60] そして彼ら移住者が新轉地周邊において廣く影響力を行使するに至る場合、彼らの存在を先住者の間でよりはっきりと正當化する必要が生じる。それまで北スマトラにおいて商業・宗教活動に關與し、かつ農耕に重要な鐵を鍛冶できる能力を有した南インド系の人々を含んだ移住者にとって、新轉地で農業生産を高め、かつ交易が可能な港市との關係を形成することは重要であった。

既に近世前夜から內陸部に活動網を有した彼らの移住を正當化する手段として、當該の地が彼らの祖先も居住した神聖な地であり、彼らが「歸還」したことを說くのはその一つと言えよう。西岸のバルスに近接するトバ湖畔地域において、下バルス王家の初代王がトバ地區を巡回した際滯在したというバッカラは、湖畔有數の稻作地帶であり、かつアチェは下バルス王家を廢絕しなかったので、內陸世界の一中心地たりえた。[61] 移住者及びそれを迎えた人々は、南インド系やジャワ系のヒンドゥ教のタームと北スマトラの在來の信仰を統合して、その地を聖地化することに努めた。十八世紀後半オランダ人が收集した話は、以下の如く語っている。[62]

この地方の住民が語るには、バタラ＝グルは天界の主であり、全人類の父である。そして以下の場合において部分的にはこの世の創造者でもある。この大地は最初から Nagapadoha（ナガパトハ）という者の頭でささえられていたのであるが、とうとう疲れて頭を振ったところ、大地は沈んでしまい、この世には水しかないようになった。人々はこうした大地と水が元々どういうふうに造られたのか知らないようであるが、彼らが言うには、水がこの世のすべての物を覆ったとき、至高神のバタラ＝グルには Puti Orla Bulan という名の娘があり、彼女はその下界に降ろしてくれるよう父に

頼み、犬に引かれて白い鉢で降りたが、水のためそこに居續けることが出來なかった。彼の父は、バッカラという名のそびえ立つ山をバタラ＝グルの娘の居住地として天界から降ろしてやり、それは今バタ地方にある。この山から次第にその他の大地が擴がっていった。……（中略）…… Puti Orla Bulan はその後大地に居住し、三人の息子と三人の娘を得た。彼らから全人類が誕生したのである。

豊かな降雨による河川や湖を多數有するインドネシアには、上述のような水ばかりの世界が說話の中にしばしば登場する。(63) 人々に時として災をもたらすが、農耕に重要な水を統べる大蛇ナガパドハが、バタラ＝グルの力により制せられ、最初にバッカラ山が造られ、それから大地がまわりに擴がっていったとしている。そしてバタ地方のバッカラに最初の人類が誕生し、それは天孫降臨したバタラ＝グルの娘の子孫であると唱えている。バッカラは人類發祥の聖地とされたのである。

トバ湖畔周邊の人々の始祖傳承はバッカラの他、同じくトバ湖畔西北部のほぼ中央部に位置し、下バルス王家が任命した一首長がそのふもとに存在したプスック＝ブヒット山に天孫降臨したとするものも、一般的に語られていた。(64) バッカラにせよプスック＝ブヒットにせよ、いずれもバルスと關係を有し、移住者の多かったトバ湖畔西北部であった。その傳承によると、最初に誕生した人類の子孫（三代目）のうちに故郷を離れ、アチェへ行きその地の王となった者と、バルスへ行きその地の王となった者とが現われたという。そして天孫降臨のあった聖山に滯った人々の子孫よりバタック人の始祖シ＝ラジャ＝バタックが生まれ、それ以降バタック人が周邊地域に擴がっていったとしている。十六世紀前半までシンケル以北の人々に對して用いられたバタ（バタック）の名稱を、スマトラ島の先住民としてその中心をトバ湖畔西北部に据え、その民族世界をアチェやバルスという周邊港市との關係のもとで位置づけたのであった。

十七世紀後半にバルスに商館を設けたオランダ東インド會社の記述は、バルスの後背地に居住する人々を指す名稱としてバタを用いている。(65) その後十八世紀・十九世紀前半のオランダ人やイギリス人の記述は、北はシンケルの後背地から南

はマンダィリンまでの北スマトラの東西兩海岸の內陸部に居住する人々を一般にバタック（バタ）人と規定している。[66] 今日バタック人は、方言の違いからカロ、ダイリ、シマルングン、トバ、アンコラ、マンダィリンの六支族よりなるとされる。十九世紀・二十世紀前半の調査では、このうちトバ、アンコラ、マンダィリン（十九世紀前半まで）及び多數のシマルングンの人々は、一般にトバを彼らの祖先の出身地とする傳承を有した。[67]

一方カロ高原に移住した人々は、最後に參入したシンビリン氏族の人々をも含め、トバ地區よりも南インド系文化色の強い世界觀を形成した。彼らの傳承は、この世界はバタラ＝グルが地上に送り込んだ Tuan Benuwa Koling（クリン〔南インド〕國王）が創造したものであるという。[68] それによれば、バタラ＝グルには三人の息子と二人の娘があった。息子の一人のクリン國王はバタラ＝グルの支援のもと、地下界を統べる大蛇 Paduka di Aji（トバ地區の Nagapadoha）を制し、大地を造ろうとした。七度試みたが、すべて失敗した。バタラ＝グルはパドゥカ＝ディ＝アジが寢ているすきに＊型の鐵格子をこれにかぶせ、これによりやっと大地が出來た。クリン國王の兄弟の Tuan Raja Samsei Sahinahina は天界にあって彼を助けて雨を降らし、地上の作物を育成させたという。

ここではトバ地區の神話同樣バタラ＝グルと大蛇パドゥカ＝ディ＝アジが登場するが、この世はクリン國王が創造したとして南インド人の存在を強調している。最後に參入したシンビリン氏族は、鐵製品を扱う技術や財力、呪術において先住者達に廣く影響力を行使できた。彼らにとってその存在を正當化する上で、バタラ＝グルがパドゥカ＝ディ＝アジを鐵格子で制したこと、またこの世の創造者がクリン國王であることはきわめて重要であった。

そしてカロ＝バタック族の由來に關しては、昔一組のバタック人男女と五人の息子達が神に導かれてカロ地區にやって來、その地の五人の女性と娶せられることとなり、北西、南、北、東、北東方向にそれぞれ村を建設した。それがカロの五氏族の祖先となったと說明する。[69]

カロ＝バタック族は、トバ湖周邊に居住したトバ＝バタック族とは異なる神話を形成したが、彼らも沿岸部に居住する

アチェ人やマレー人に對してはバタック人を稱した。カロ族にとって最も重要な港市は、デリであった。カロ地區からは森林生産物、胡椒、米、家畜が輸出された。デリを影響下に置いたアチェにとって、胡椒や森林生産物の集荷が重要であるばかりでなく、首都クタラジャはほぼ全面的に食糧を輸入に頼っており、内陸部のもたらす米や家畜は貴重であった。[70] この點はトバ地區を後背地としたバルスの場合も同様であった。[71] 港市は地域の商業活動を司る中心地であり、かつイスラームの宗教活動の據點であったが、アチェにせよバルスにせよ内陸部との關係を形成する上で、イスラームを強制しなかった。むしろ後背地の農業生産を司る文化を認め、これとの關係を強化しようとした。[72]

アチェはイスカンダル＝ムダの時代に全盛期を迎えた後、十七世紀後半には影響力を後退させたが、マラッカ海峡の交易活動はジョホールの隆盛によりその後も活潑で、スマトラ東岸には代ってタミアン、ランカット、デリ、スルダン、バトゥバラ、アサハン等のマレー人港市國家の成立を見た。デリはカロ地區にとって主要な港市として存續し、アチェのスルタンに任命された「四首長」は、その後も代が替わるごとにアチェからその權威を承認されたデリのスルタンにより、その地位を保障された。[73]

カロ＝バタック人はその後も高い移動性を有し、一部は、カロ高原から稻作可能なアラス川沿いに北上し、[74] さらにはタワル湖周邊にも移住した。カロのシンビリン、タリガン、カロ＝カロ、ギンティン氏族のうちに、パサンガン川上流部のタワル湖西岸に移住した一團があった。タワル湖周邊の人々の傳承によると、彼らカロ人はまずアチェに赴きイスラームに改宗した後、タワル湖西岸の肥沃な地に移住し、先住者の一團を追放したという。[75] 彼らの移住活動は歴史的事實であり、その頭目はアチェのスルタンより「四首長」と同等の地位が保障された。彼らは追放した一團からは不滿を買ったが、タワル湖南岸の「四首長」の一人リンガの首長の一族とは良好な關係を形成した。

アチェの影響力が及んだのに加え、こうした移住者が參入したタワル湖周邊の人々は、ガヨ人という民族世界を形成した。二十世紀初頭に語られていた口頭傳承によると、ガヨ人はすべてリンガの地より出生した人々の末裔であるという。[76]

それによれば、スマトラ島の始祖は外部世界からやって來たDewajadi（デワジャディ）であるという。デワジャディはかつて大きな大陸に住んでいて、大きな凧を持っていた。ある時その凧をあげていると突然強風が起こり、凧とともに彼も空中に飛ばされた。凧はさらに上昇を續け、一晝夜飛んだ後、デワジャディは海に降りかかったと言う。その時神の使者より一握りの土が海にまかれ、デワジャディはその上に立つことができた。神の力によりその土地はますます擴がり、草木が生え出した。これがスマトラ島の始まりで、その始まりがリンガの地であるという。リンガの支配者はデワジャディの子孫であり、アチェの支配者はリンガの支配者の弟のようなものである。何故ならこのスマトラ島に最初にいたのは、バタック人であるからである。そして彼らのうちでイスラーム教徒になる者が現われた。イスラームに導いたのは、メッカからやって來たイスマイルであった。イスラーム教徒になったデワジャディの子孫でリンガからアチェへ行った人物がアチェの始祖となり、一方割禮を怖がりリンガから南へ逃げ去った人物がカロ＝バタック人の始祖となった。そしてリンガに滯まったデワジャディの子孫がガヨ人になったという。

言語學的には、ガヨ人がバタック人から分化した民族である可能性はきわめて低いとされている。(77) ここでガヨ人がイスラーム化したバタック人であると唱えているのは、スマトラ島におけるアチェ人に對する先住民としての主張であると考えられる。このタワル湖周邊地域は、アチェの擡頭以前バタ王國の存在した所であった。アチェは內陸部を軍事的に制壓したが、先のトバ湖畔やカロ地區の場合と同樣、タワル湖周邊の農業や家畜生產に依存していた。またイスラーム教徒を唱えるのは、南接する非イスラーム教徒のカロ＝バタック人に對する優越感の表現と言えよう。メッカからやって來たイスマイルとは、『パサイ列王傳』や『マレー年代記』に述べられた、北スマトラに最初にイスラームをもたらしたイスマイルのことであった。

このガヨ人世界の形成に、イスラーム教徒となったカロ出身者の果した役割は重要である。彼らはアチェの支持のもとに肥沃なタワル湖西部に移住した。彼らにとってアチェとの關係を維持し、かつタワル湖周邊において人々に受け入れら

れるためには、良好な關係を形成したリンガがスマトラの始まりであり、彼らイスラーム化したカロ＝バタック人がこの地に「歸還」したことを了解されねばならなかった。今日ガヨ人は、一般にリンガに居住した祖先の末裔であると唱えている。二十世紀初頭のスヌック＝ヒュルフローニェの記述によれば、タワル湖西岸のブブスンを中心に、カロ＝バタック族のうちに存在する氏族名を有する「ガヨ」人が存在した。(78)

トバ＝バタック、カロ＝バタック、ガヨが、その民族世界の原型をアチェやマレー人港市國家との關係のもとで形成したという點は、ミナンカバウも同様である。既にミナンカバウ世界の原型が、パサイやマラッカとの關係の中で形成されたことは、『パサイ列王傳』や『マレー年代記』にも記述されていた。アチェが隆盛した十六世紀中葉から十七世紀前半に、胡椒や金を西岸諸港市に搬出した内陸部で、農業空間が發展をとげ、從來以上の集住傾向が生じたことは容易に推測される。ただ史料の制約上、この時期についてはよくわからない。アチェが影響力を後退させた後の十七世紀中葉以降も、ジョホール――スマトラ東岸――ミナンカバウの商業活動は、金、胡椒をめぐり活潑であった。(79) こうした狀況下、十八世紀後半にマースデンが收集したジョホールの人々の話は、ジョホールとミナンカバウの誕生を以下の様に語っている。(80)

イスカンダル〔アレクサンダー大王（引用者）〕は海に潜り、海の王の娘と結婚した。彼はそれにより三人の息子をもうけ、彼らが成人すると母親は三人を父のもとに送り届けた。父親は彼らに王冠を授け、彼らに落着くべき王國をさがすよう命じた。シンガプラ海峽についたとき、三人は誰の頭に王冠がぴったり合うのかためすことにした。長男がまず試みたが、冠が頭まで上げられなかった。次男も同じであった。三男がもう少しのところで頭にかぶりそうになったとき、冠が手から海に落ちてしまった。そこで長男は西に行きルムの王となり、次男は東へ行き中國の王となった。三男はジョホールにとどまった。その頃プルチャ島（スマトラ）はまだ海中から上がってなかった。島が現われ始めたとき、ジョホール王は釣をしていて、島が Si Kati-muno という大蛇によってつぶされそうになっているのを

を見た。王はSimandang-giriという剣で蛇を殺したが、剣は百九十の切缺きを受けた。島はこうして現われることができ、王は火山のもとに行って住みつき、その子孫がミナンカバウの王となった。

前半の部分は、十七世紀初めに編纂された『マレー年代記』と類似點を持っている。が、『マレー年代記』で重要な役割を擔ったチョーラ王は姿を消し、アレクサンダー大王自身が海の王の娘と結婚し、三人の息子が出來たとなっている。マレー人の王であるジョホールの王は、世界帝國のルム王（オスマン＝トルコのカリフ）と中國王の兄弟とされている。スマトラ島が海中にあり、大蛇によってつぶされそうになったという型の話は、トバ、カロいずれのバタック人の神話にも登場した。スマトラ在來の文化的要素の存續を認めることができよう。ここではミナンカバウが、ジョホール王によってスマトラ最初の人間の居住地となったとされている。

ミナンカバウ地區の青年男子にはムランタウという出稼ぎ、移住の慣習があり、多くがマラッカ海峽周邊のスマトラ東岸やマレー半島で活動した。財力を蓄えまたイスラームの宗教知識を有して中部スマトラに歸るとき、彼らは人々に影響力を行使しえた。ミナンカバウのイスラーム化は、十六世紀以降商人や王室を中心に進展した。[81] マラッカ海峽周邊域から歸鄕した彼らにとって、マレー人の王によりスマトラ島が誕生することが出來、その地に彼らが「歸還」したことを說くことは、人々にその存在の正當性を語る上で重要であった。

上記のマレー人主導型スマトラ誕生神話は、世界帝國の諸王と肩を並べるとされたジョホール王がそのままスマトラ島の始祖としてミナンカバウの先祖王となるため、ミナンカバウ人にとっては受け入れやすい誕生神話と言えよう。十九世紀のミナンカバウ人の間では、アレクサンダー大王の血統を有し、ルム王、中國王を兄弟とするMaharaja Diirajaがスマトラ島が最初に海中から現われた火山ムラピ山のふもとに住みつき、スマトラ最初の住人になったと一般的に語られていた。[82] そしてその子孫が、アチェを始めスマトラ東西岸の諸港市に赴いたとした。ミナンカバウの場合も、ガヨやバタックと同じく、自らの地からスマトラ島が始まり、彼らがこの島の「土着先住民」であり、彼らから周邊港市の支配者が誕

生したと唱えたのであった。

六　結　論

本稿は、スマトラ島において港市と後背地との交流が活性化した近世、内陸農業空間に移住者が定着する際に「土着先住民」の觀念の創出に寄與し、彼らの活動の正當化を試みたことを論じた。ガヨ、バタック、ミナンカバウのいずれも、世界帝國を任じた港市國家の周邊部にあって、各々がスマトラ島最初の住人の末裔を唱えた。近世港市國家の權限の增大に對し、後背地側は土着民族の概念を構築し、先住性を主張してこれに對應したと言える。(83) 從來プロト＝マレー系、新マレー系という分類のもと B. C. 2500—1500 の時期にこれらの人々の祖先がスマトラに居住するに至ったとされてきたが、その民族的アイデンティティの原型は十四—十七世紀の時期に形成された可能性が高い。

本稿で論じた移住者は、「土着先住民」の概念の創出に寄與すると同時に、インド文化やイスラームをもたらすことにも關與した。これまでインド化やイスラーム化を考察する際、外來文化をもたらした者とそれを受容した現地側との對比的觀點からしばしば論じられてきたが、バタック地區においてインド化と「バタック」化、ガヨ地區においてイスラーム化と「ガヨ」化、ミナンカバウ地區においてイスラーム化と「ミナンカバウ」化とは、移住者の介在により同じ局相で起きていた可能性は高い。「外來」文化の導入と「現地側の主體」形成とを媒介した移住者の役割は、解明されねばならない重要な課題と言えよう。

本稿は直接扱わなかったが、言うまでもなく、東南アジアへの移住者だけでなく、東南アジアからも周邊の南アジアや中國、西アジアに移住した人々が存在したと考えられる。(84) 彼らがそれらの地に定着していく際、どのように現地社會の觀念的構築に寄與したのかは興味ある問題である。こうした移住者の存在に着目するとき、東南アジアの歴史研究は同時にインドや中國、西アジアらの周邊世界の形成史とも關わる展望が開かれてくる。一見外在的には古くから固有の世界を形

成していたかのように思われがちの地域世界は、彼ら移住者の役割に着目するとき、彼らによっていかに「古く」からかつ「固有」であったかの如く観念形成されたのかを、我々に提示してくれるのである。

註

(1) A. Reid, *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450–1680, Volume Two: Expansion and Crisis*, (New Haven and London, 1993), pp. 62–131, 桜井由躬雄、石澤良昭、桐山昇『東南アジア』、朝日新聞社、一九九三年、一〇七—一三二頁。

(2) F. M. Lebar, (ed.), *Ethnic Groups of Insular Southeast Asia*, vol. 1, (New Haven, 1972), pp. 15–47; P. Voorhoeve, *Critical Survey of Studies on the Languages of Sumatra*, (The Hague, 1955), pp. 5–23. 尚十九世紀後半—二十世紀前半のプランテーション企業の進出に伴い、北スマトラにはジャワ人や中國人勞働者が流入し、今日各々數十萬人の人口を數えるが、本稿の近世をめぐるテーマとは直接關係ないので、彼らは省いた。

(3) J. C. van Eerde, *De Volken van Nederlandsch-Indië*, vol. 1, (Amsterdam, 1920), p. 20; E. M. Loeb, *Sumatra, Its History and People*, (Kuala Lumpur and Jakarta, 1972), pp. 15–16.

(4) N. J. Krom, "De Hindoe-Javaansch Tijd", in F. W. Stapel ed., *Geschiedenis van Nederlandsch Indië*, vol. 1, (Amsterdam, 1938), pp. 136–142, (N. J. クロム著〔有吉嚴編譯〕『インドネシア古代史』、天理教道友社、一九八五年、三七—四五頁); C. Snouck Hurgronje, "De Islam in Nederlandsch-Indië", in *Verspreide Geschriften*, vol. 4, part 2, (Bonn and Leipzig, 1924), p. 364.

(5) J. C. van Leur, *Indonesian Trade and Society*, (The Hague and Bandung, 1955); K. Hall, *Maritime Trade and State Development in Early Southeast Asia*, (Sydney and Wellington, 1985).

(6) 筆者は移住者の役割を重視することで、かつて論じられたインディアン・コロニーによる東南アジアの文化社會形成の論議（例えばクロム、前掲書、三七—四五頁）に戻るつもりは毛頭ない。東南アジアにおけるインド化やイスラーム化を論ずる際に現地側の主體性を重視し、インド文化やイスラームを受容した側の意向、それ以前の東南アジア在來の文化の存續やそれと新たに受容した觀念との接合等の解明にエネルギーを注ぐことは、重要であると考える。ただ、外來と現地側という外と內とを固定化してしまうと、他地域からやって來、現地の人々と接觸・混淆したハイブリッドな人々の存在を見落しがちになる。本稿が注目したいのは、この人々が當該の社會において「外」と「內」とを設定したり、媒介する役

割である。Cf. J. C. Heesterman, "The 'Hindu Frontier'", in *India and Indonesia: General Perspectives*, ed. by J. C. Heesterman, Taufik Abdullah et al., (Leiden and New York, 1989), pp. 1–15.

(7) マルコ・ポーロ（愛宕松男譯注）『東方見聞錄2』（平凡社、一九七一年）、一五一頁。

(8) イブン・バットゥータ（前嶋信次譯）『三大陸周遊記』（河出書房新社、一九七七年）、二七五頁。

(9) A. H. Hill ed., "Hikayat Raja-Raja Pasai", *Journal of the Malayan Branch of the Royal Asiatic Society*, vol. 33, part 2, (June, 1960), p. 59.

(10) プトレマイオスの『地理學』（A. D. 二世紀）に記されている Batoi や十三世紀の『諸蕃志』の三佛齊の條に登場するその屬國（Pata）が Batak に比定しうるとする說がある（G. E. Gerini, *Researches on Ptolemy's Geography of Eastern Asia*, [London, 1909], p. 660; F. Hirth and W. W. Rockhill, *Chau Ju-Kua: His Work on the Chinese and Arab Trade in the twelfth and thirteenth centuries, entitled Chu-fan-chi*, [St. Petersburg, 1911], p. 66）が、十四世紀の北スマトラを比較的詳しく述べている『パナイ列王傳』や同じく十四世紀に作成されたマジャパヒト王朝年代記の『ナガラクルタガマ』に、周邊の Barus, Tamiang, Mandailing, Pane, Aru 等が登場しても Batak が登場しないこと（Hill, *op. cit.*, p. 55 and 71; T. G. T. Pigeaud ed., *Java in the Fourteenth Century, Nāgara-kĕrtāgama*, vol. 1, [The Hague, 1960], p. 11; クロム、前掲書、五一二一五一三頁）、また漢籍史料では十五世紀の鄭和の遠征に參加してより詳しく記述された『瀛涯勝覽』や『星槎勝覽』に Batak に比定できる地名が登場しないことを考えると、それらの說は疑わしくなる。

(11) Nicolò de Conti, "The Travels of Nicolò Conti, in the East", in *India in the Fifteenth Century*, ed. by R. H. Major, (London, 1857), pp. 8–9.

(12) トメ・ピレス（生田滋、池上岑夫、加藤榮一、長岡新治郎譯・注）『東方諸國記』（岩波書店、一九八六年）、二七二頁。

(13) メンデス・ピント（岡村多希子譯）『東洋遍歷記1』（平凡社、一九七九年）、三七一五五頁。

(14) Loeb, op. cit., p. 20. その語源については、batah-mamatah（〔馬か何かに〕乘る）、bateck（入れ墨をした人）、イスラーム教徒に對し"偶像を崇拜する人"〔orang de*bata*〕）に由來する、あるいはサンスクリットの bhata または bhrta（傭兵、兵士、戰士、雇い人）より由來する等諸說がある（M. Joustra "De Bataks", in van Eerde, *op. cit.*, p. 122; J. B. Neumann, "Het Pane- en Bila-stroomgebied op het eiland Sumatra", *Tijdschrift van het Nederlandsch Aardrijkskundig Genootschap*, 2nd series, vol. 3, no. 2, [1886], pp. 12–13; R. S. Kipp, *Dissociated Identities: Ethnicity, Religion, and Class in an Indonesian Society*, [Ann Arbor, 1993], p. 27）が、定說はない。

(15) ピレス、前掲書、二八八頁。
(16) *Ibid.*, 二七四—二七五頁。
(17) Hill, *op. cit.*, p. 106.
(18) クロム、前掲書、二五四頁。
(19) *Ibid.*, 三一一頁。
(20) *Sějarah Mělayu or Malay Annals*, (C. C. Brown tr.) (Kuala Lumpur, London, New York and Melbourne, 1970), pp. 1–12.
(21) F. D. K. Bosch, "Verslag van een reis door Sumatra", *Oudheidkundig Verslag 1930*, (Batavia, 1931), p. 137 and 145; F. M. Schnitger, *The Archaeology of Hindoo Sumatra*, (Leiden, 1937), p. 24 and 29.
(22) L. C. Damais, "Études d'épigraphie Indonésienne", *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient*, vol. 46, part 1, (1952), p. 101.
(23) N. Sastri, "A Tamil Merchant-guild in Sumatra", *Tijdschrift voor Indische Taal-, Land- en Volkenkunde* (以下 *T. I. T. L. V.* と略稱), vol. 72, (1932), pp. 314–327.
(24) 重松伸司『マドラス物語——海道のインド文化誌』(中央公論社、一九九三年)、六四頁。
(25) クロム、前掲書、五一〇頁。Schnitger, *op. cit.*, p. 13.
(26) Hill, *op. cit.*, pp. 56–57.
(27) *Sějarah Mělayu*, p. 32.
(28) 馬歡(小川博譯注)『瀛涯勝覽』(吉川弘文館、一九六九年)、七二及び九二頁。
(29) Hill, *op. cit.*, p. 62.
(30) *Ibid.*, p. 74.
(31) *Ibid.*, pp. 76–83.
(32) M. Joustra, "Mededeelingen omtrent en opmerkingen naar aanleiding van het "pěk oewaloe" of het doodenfeest der měrga Simbiring", *T. I. T. L. V.*, vol. 45, (1902), pp. 541–556; S. van Ronkel, "Drawidische volksnamen op Sumatra", *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* (以下 *Bijd.* と略稱), vol. 55, (1903), pp. 358–362.
(33) 本文で述べた一〇八八年のベルス近郊のタミル語碑文には、商人達が活動相手とした國々の名稱として、Chēra, *Chōḷa*, *Pāṇḍya*, *Maleya*, Magadha, Kauśala, Saurāshṭra, Dhanushṭra, Kurumbha, Kāṃbhōja, Gaulla, Lāḷa, Barvvara, Pārasa, Nēpāḷa, Ēkapāda, Lambakarṇṇa, Strī-rājya, Ghōḷāmukha が具體的に擧げられている (Sastri, *op. cit.*, p. 320 and 323.)。
(34) J. H. Neumann, "Bijdrage tot de geschiedenis der Karo-Batakstammen", *Bijd.*, vol. 82, (1926), pp. 16–27; "Tjeritera Sembiring Mergana (soekoe)", in L. C. Westenenk Collection, no. 44 (in Algemeen Rijksarchief [The Hague]); E. E. McKinnon, "New Light on the Indianization of the Karo Batak", in *Cultures and Societies of North Sumatra*, ed. by R. Carle, (Berlin and Hamburg, 1987), pp. 84–85.
(35) McKinnon, "New Light", pp. 86–87; A. C. Milner, E.

E. McKinnon and Tengku Luckman Sinar S. H., "A Note on Aru and Kota Cina", *Indonesia*, no. 26, (Oct. 1978), pp. 24-25.

(36) ピンス、前掲書、二七四—二七五及び二九〇頁。

(37) J. H. Neumann, "Bijdrage tot de geschiedenis der Karo-Batakstammen II", *Bijd.*, vol. 83, (1927), pp. 162-180; "Nota van toelichting betreffende de Simeloengoensche landschappen Siantar, Panei, Tanah Djawa en Raja", *T. I. T. L. V.*, vol. 51, (1909), pp. 554-556; J. Drakard ed., *Sejarah Raja-Raja Barus*, (Jakarta and Bandung, 1988), pp. 195-201.

(38) Bosch, *op. cit.*, pp. 146-147; Schnitgter, *op. cit.*, pp. 26-27.

(39) クラム、前掲書、五〇九頁。

(40) ピンス、前掲書、四九五頁。

(41) ピント、前掲書、三七—三八頁。

(42) M. A. P. Meilink-Roelofsz, *Asian Trade and European Influence: In the Indonesian Archipelago between 1500 and about 1630*, (The Hague, 1962), pp. 116-118.

(43) C. R. Boxer, "A Note on Portuguese Reactions to the Revival of the Red Sea Spice Trade and the Rise of Atjeh, 1540-1600", *Journal of Southeast Asian History*, vol. 10, no. 3, (Dec. 1969), pp. 415-428.

(44) R. H. Djajadiningrat, "Critisch overzicht van de in Maleische werken vervatte gegevens over de geschiedenis van het soeltanaat van Atjeh", *Bijd.*, vol. 65, (1911), pp. 147-154; D. Lombard, *Le Sultanat d'Atjéh au temps d'Iskandar Muda, 1607-1636*, (Paris, 1967), pp. 36-37.

(45) ピント、前掲書、三九頁。

(46) 同上書、四七頁。

(47) 同上書、四八頁。

(48) 同上書、五一頁。

(49) 同上書、六五及び八四—八五頁。

(50) Djajaningrat, *op. cit.*, p. 154.

(51) J. Kathirithamby-Wells, "Achehnese Control over West Sumatra up to the Treaty of Painan, 1663", *Journal of Southeast Asian History*, vol. 10, no. 3, (Dec. 1969), p. 460.

(52) Milner, McKinnon and Tengku Luckman Sinar, *op. cit.*, p. 18; "The Expedition of Commodore Beaulieu to the East-Indies", in *Navigantium atque Itinerantium Bibliotheca: A Complete Collection of Voyages and Travels*, ed. by J. Harris, vol. 1, (London, 1744), p. 748; "Asahan", in L. C. Westenk Collection, no. 44.

(53) C. Snouck Hurgronje, *Het Gajōland en zijne bewoners*, (Batavia, 1903), p. 93.

(54) M. Joustra, *Batakspiegel*, (Leiden, 1910), p. 196; P. A. L. E. van Dijk, "Rapport betreffende de Si Baloengoensche landschappen Tandjoeng Kasau, Tanah Djawa en Si Antar", *T. I. T. L. V.*, vol. 37, (1894), pp. 171-172.

(55) Teuku Iskandar, *De Hikajat Atjêh*, (The Hague, 1958), p. 167.

(56) Neumann, "Bijdrage", *Bijd.*, vol. 82, (1926), p. 33.

(57) *Ibid.*, p. 19; "Tjeritera Sembiring Mergana (soekoe)". バタ王國やシンケル周邊において活動網を有した彼らとアチェとの抗争の一端を語るものであろう。またアルとアチェとの抗争により、東岸附近からカロ高原に移動した人々も存在したと考えられる。

(58) Neumann, "Bijdrage", vol. 82, (1926), pp. 33-34; W. K. H. Ypes, *Bijdrage tot de kennis van de stamverwantschap, de inheemsche rechtsgemeentschappen en het grondenrecht der Toba- en Dairibataks*, (Leiden, 1932), pp. 60-64.

(59) Drakard, *op. cit.*, p. 196 and 199.

(60) "Nota", p. 555.

(61) 下バルス王家の傳承によれば、初代王スルタン＝イブラヒムはバッカラの地に滯在中、その地の首長の娘と結婚したという。そして彼がバッカラを去る際、妻にやがて生まれるであろう子供を彼の代理として尊崇するよう命じ、イブラヒムが造る町に貢納を定期的にするよう人々に言い殘したという (Drakard, *op. cit.*, pp. 196-198; 拙稿「北スマトラの港市國家と後背地」『東南アジア——歷史と文化——』二二、(一九九三)、一〇一一四頁)。

(62) J. C. M. Radermacher, "Beschrijving van het eiland Sumatra, in zoo verre hetzelve tot nog toe bekend is", *Verhandelingen van het Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen*, vol. 3, (1824), pp. 9-10.

(63) 小野明子「日本神話とインドネシア神話」(大林太良編『日本神話の比較研究』〔法政大學出版局、一九七四〕、一六二—一六八頁。

(64) W. M. Hoetagaloeng, *Poestaha taringot toe tarombo ni Bangso Batak*, (Laguboti, 1926), pp. 24-26; Ypes, *op. cit.*, p. 26 and pp. 68-69; Drakard, *op. cit.*, pp. 219-220.

(65) VOC 1272, "Raport vanden ondercoopman en boeckhouder Johannes Melman wegens Baros (29 Aug. 1669)", p. 1067; VOC 1290, "Rapport vanden ondercoopman François Backer wegens Baros etc. dato 31 Dec. 1671", p. 600; J. Drakard, *A Malay Frontier: Unity and Duality in a Sumatran Kingdom*, (Ithaca, 1990), pp. 33-34.

(66) Radermacher, *op. cit.*, pp. 8-9; M. Marsden, *The History of Sumatra*, (reprint of the 3rd ed., Kuala Lumpur, New York, London and Melbourne, 1966), pp. 365-366; J. Anderson, *Mission to the East Coast of Sumatra in 1823*, (reprint, Kuala Lumpur, Singapore, London and New York, 1971), pp. 242-244, 250-251, 266-268, 295-296, 302-304, 315, and 324-330; H. N. van der Tuuk, *A Grammar of Toba Batak*, (The Hague, 1971), p. XLVII.

(67) Hoetagaloeng, *Poestaha*; Ypes, *op. cit.*, pp. 24-75; J. Tideman, *Simeloengoen: Het land der Timoer-Bataks*

in zijn vroeger isolatie en zijn ontwikkeling tot een deel van het cultuurgebied van de Oostkust van Sumatra, (Leiden, 1922), pp. 148–153; J. Keunning, "Toba-Bataks en Mandailing-Bataks: Hun culturele samenhang en daadwerkelijk antagonisme", *Indonesië*, vol. 7, (1953–1954), pp. 160–161. 尙、マンダイリン族は十九世紀中葉以降多くがイスラームに改宗し、バタック人と呼ばれることを拒否し始めた。

(68) C. J. Westenberg, "Aanteekeningen omtrent de godsdienstige begrippen der Karo-Bataks", *Bijd.*, vol. 41, (1892), pp. 216–218.

(69) C. de Haan, "Verslag van eene reis in de Battaklanden", *Verhandelingen van het Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen*, vol. 38, (1875), pp. 19–21.

(70) T. Ito, "A Note on Some Aspects of the Trade of Aceh in the 17th Century", 『南方文化』九號、pp. 34–39.

(71) H. Kroeskamp, *De Westkust en Minangkabau (1665–1668)*, (Utrecht, 1931), p. 150; Broch Onz, 93=542, "Onze vestging te Baroes", (in Koninklijk Instituut voor de Tropen [Amsterdam]).

(72) この點については、拙稿「北スマトラの港市國家と後背地」を參照されたい。

(73) van Dijk, *op. cit.*, p. 179; E. Netscher, "Togtjes in het gebied van Riouw en onderhoorigheden", *T. I. T. L. V.*, vol. 14, (1864), p. 348.

(74) このアラス川沿いに參入したカロ人は、他のバタック人やアチェやミナンカバウからの出身者も混え、バタック人やこれから述べるガヨ人とも異なるアラス人という民族集團を唱える場合があった。その場合も移住者が民族世界の形成に重要な役割を果した (A. Iwabuchi, *The People of the Alas Valley: A Study of an Ethnic Group of Northern Sumatra*, [Oxford, 1994], pp. 1–19)。

(75) Snouck Hurgronje, *Het Gajōland*, pp. 65–68; J. R. Bowen, *Sumatran Politics and Poetics: Gayo History, 1900–1989*, (New Haven and London, 1991), p. 55.

(76) Bowen, *op. cit.*, pp. 216–217.

(77) H. L. Shorto, "Gayo Consonant Correspondences", *Pacific Linguistics*, series C, no. 42, (1976), pp. 199–217.

(78) Snouck Hurgronje, *Het Gajōland*, p. 68.

(79) W. H. M. Schadee, *Geschiedenis van Sumatra's Oostkust*, vol. 1, (Amsterdam, 1918), pp. 11–13; C. Dobbin, *Islamic Revivalism in a Changing Peasant Economy: Central Sumatra, 1784–1847*, (Copenhagen, 1983), pp. 119–120.

(80) Marsden, *The History*, pp. 341–342.

(81) Dobbin, *op. cit.*, p. 119.

(82) "Legende van de afkomst der Sumatranen en van hunne instellingen", *Tijdschrift voor Nederlandsch-Indië*, vol. 30, part 1, (1859), pp. 378–389; Taufik Abdul-

lah, "Modernization in the Minangkabau World: West Sumatra in the Early Decades of the Twentieth Century", in *Culture and Politics in Indonesia*, ed. by C. Holt, (Ithaca and London, 1972), pp. 183–184. T. Kato, *Matriliny and Migration: Evolving Minangkabau Traditions in Indonesia*, (Ithaca and London, 1982), p. 35.

(83) Cf. Bowen, *op. cit.*, pp. 3–6, 尙、東南アジア大陸部においても近世にビルマ、タイ、ベトナムの平地を中心とする王權の擴大にともない、平地民と周邊山岳民族（カチン、カレン、チン、ラフ等）との差異が強調され始めたことが、指摘されている（W. A. Andaya, "Political Development between the Sixteenth and Eighteenth Centuries", in *The Cambridge History of Southeast Asia*, ed. by N. Tarling, vol. 1, [Cambridge, 1992], p. 444)。

(84) 例えば、かつて數を表わすバタック語の單語がデカン高原で商業用語として用いられたという報告がある（S. van Ronkel, "Drawidische Volksnamen op Sumatra", *Bijd.*, vol. 74, [1918], p. 264)。おそらくスマトラからインドへの移住者が相當數いたものと思われる。

Hua Hospital, and further examine their disaster relief activities in Hong Kong and Canton.

The Dong Hua Hospital was founded in 1869 to provide medical services for the Chinese population of Hong Kong, however, circumstances in Hong Kong at that time required other charitable social services. Thus, the Dong Hua Hospital came to manage the repatriation of emigrants and the transportation of dead bodies, as well as to organize the raising of relief funds among overseas Chinese. The Dong Hua Hospital acted as a pivot in the Cantonese Network, and as such was able to effectively obtain both reputation and financial resources.

The establishment of the Dong Hua Hospital involved the emergence of a new local elite which represented the several guilds. As the activities of the Dong Hua Hospital were extended, the government in Hong Kong began to fear the influence of Chinese officials.

In the early twentieth century the Dong Hua Hospital worked in cooperation with the benevolent associations in Canton to provide relief to disaster victims. As the city of Hong Kong flourished, the Dong Hua Hospital took the initiative in the management of social services in both Hong Kong and Canton.

THE ROLE OF IMMIGRANTS IN THE RECONSTRUCTION OF INNER SUMATRAN ETHNIC IDENTITIES IN THE EARLY MODERN ERA

HIROSUE Masashi

On the eve of the early modern era, Sumatra became one of the most prosperous commercial areas in Southeast Asia on the basis of the export of precious forest and mineral products and pepper. Pasai, Minangkabau, and south Indian merchants developed commercial networks between ports and their hinterlands.

When Aceh emerged as a powerful port polity in the sixteenth and seventeenth centuries, the influence of these merchants was overshadowed

by the power of Aceh, which at that time placed major Sumatran ports, except that of south Sumatra, under its firm control. However, Aceh itself was dependent on the hinterlands from which commercial products and foodstuffs were supplied to coastal entrepots. Some of the itinerant merchants involved in this supply network chose to settle in inner agricultural regions.

In order to legitimate their immigration to these inner regions, these people attempted to construct an ethnic identity by claiming that both they themselves and the local indigenous peoples were descended from a common ancestor who had originally lived in Sumatra, and whose descendants had subsequently spread throughout Sumatra. The Gayo, Batak and Minangkabau ethnic identities were reformed around their respective sacred places where, according to legend, their ancestors had lived.

Although these Sumatran peoples are often described as Proto-Malays or Deutero-Malays who emigrated to Sumatra very early (ca. 2000 B. C.), it is highly probable that the ethnic identities of Gayo, Batak and Minangkabau were reshaped in the sixteenth and seventeenth centuries. Previous studies of immigrants in Southeast Asia have tended to focus mainly on their role in the introduction of foreign culture to a native Sumatran world. It is necessary in addition, however, to examine the other important role of these immigrants in the creation of the "indigenous" world.

CHRISTIAN ARABS IN THE EARLY ISLAMIC PERIOD: THE CASE OF THE BANŪ TAGHLIB

OTA Keiko

My intent in this article is to study the history of non-Muslims living under Muslim rule, and in particular to analyze that which can be extrapolated from the history of the Banū Taghlib. The Banū Taghlib were one of the most influential tribes of the Rabīʿa coalition. Originally, they controlled an area in the northeast of the Arabian Peninsula,